

天地の初めと国生み

(要旨)

神道創世神話によると、世界とその住人は、「創られた」のではなく「生まれた」となっております。そして夫婦の神、伊弉諾尊と伊弉冉尊がこの国づくりのほとんどを果たしました。神が結婚し、日本国土（水穂の国）をはじめ、国土を形づくる数多くの子をお生みになりました。伊弉諾尊と伊弉冉尊の神話は、男と女、結婚のあり方、生死と死後の世界、生死の伝説などを紹介する上でとても重要です。

=====

「神」の始まり

初めに、世界は地上界と天界に分かれました。そして高天原に三柱の神が生まれました。最初の葦が根を下ろし、芽吹くように二柱の神が更に現れました。これら五柱の神は別天つ神で、それぞれ独身（ひとりみ）で現れた形にならない神です。その後、次々と数世代の「夫婦」の神が現れ、最後に現れたのが、神代七代の男の伊弉諾尊と女の伊弉冉尊でした。

この時地上界は、まだ若く海に浮かぶ油のごとくただよっていました。年長の神たちは、この神々に聖なる矛を授け、地上界を治めるように遣わせました。二柱は、浮き棧橋に立って混沌を混ぜることにしました。矛を降ろして掻き回してから引き上げ、その矛の先から海水が落ちました。それが最初に出来た島で、この二柱が天から降りて住んだオノコロ島です。

日本列島の国生み

地上界に降臨した後、伊弉諾尊と伊弉冉尊は、お互いの身体に違いを知って、一緒になって残りの国を生むことを決めました。そして天の御柱を三回回って言葉を交わし結婚します。伊弉冉尊が先に言葉をかけたために、初めはちゃんとした子どもが生まれませんでした。結婚の儀式をやり直して、今度は、伊弉諾尊が先に言葉をかけました。こうして二柱は、日本の島々と海、風、山、全ての自然現象を治める神々を無事にお生みになりました。

死者の世界

しかし不運にも、伊弉冉尊が火の神をお生みになった時、伊弉冉尊は、重傷を負い、亡くなってしまいました。伊弉諾尊は悲しまれて、死者の世界へ伊弉冉尊を連れ戻しに行くことを決めました。

伊弉諾尊が着いた時には、伊弉冉尊はもう戻ることができないとされる黄泉の国の食べ物をすでに食べてしまった後でした。伊弉諾尊が懇願するので、伊弉冉尊は、まだやり残したこのとのある地上界のために、伊弉諾尊と一緒に戻ることができるかどうか、黄泉の国の神と話をすることにしました。その前に伊弉冉尊は伊弉諾尊に、戻るまで外で待ち決してわたしを見ないようにと言いついて残して行きました。伊弉諾尊はそれに応じました。

長い時間がすぎ、伊弉諾尊は我慢できませんでした。伊弉諾尊は、伊弉冉尊の言葉を聞かず、見に行くと、驚くことに伊弉冉尊は無残な姿になっていました。あまりの恐ろしさに伊弉諾尊は、一目散に妻から逃げました。伊弉冉尊は追いかけていましたが、伊弉諾尊は大きな岩で黄泉の国への道を塞ぎ、伊弉冉尊が追ってこれないようにしました。

イザナギの「禊」

地上界に戻ると、伊弉諾尊は、黄泉の国が汚れた場所だと言って、汚れた体を清めました。神道の儀式で行われる水で身体を清めること、「禊」の始まりだと考えられています。

伊弉諾尊が顔を清めると代表的な三柱：左目から日の神天照大神、右目からは月の神月読命、鼻から海原の神素戔鳴尊が生まれました。伊弉諾尊は、この三柱にそれぞれ天の国、夜の国、海原を治めるように授けました。

高千穂と「国生み」

古い文書から、これらの出来事が起こった場所を正確に判断することは難しいことですが、高千穂信仰では、高千穂峡のそばのオノコロ池の中にある島こそが、伊弉諾尊と伊弉冉尊の二柱が結婚し、住み、日本の島々を生んだオノコロ島であると信じています。この信仰によって、高千穂は、地球、生命、そしてその住人が生まれた地とみなされています。